

愁眉不可有延命之計、汝等以壯年之身、徒莫殞命、棄置吾於此山、可奉尋源家者、然問、光員等、周章雖斷腸、送老父於走湯山、於此山景員遂出家云々兄弟赴甲斐國、今夜亥刻、著于伊豆國、府祓土之處、土人等怪之、追奔之間、光員景廉共以分散、互不知行方云云、

〔吾妻鏡〕三、壽永三年三月二十七日丙辰、三品羽林著伊豆國府、境節武衛令坐北條給之間、景時以專使伺子細、早相具可參當所之由被仰、

〔梅松論〕十三日、建武二年十二月はれまをもまたずして、伊豆の國府に攻入給ふ處に、義貞以下の輩、水呑の陣を引打て、通夜沒落しける、

〔東關紀行〕伊豆の國府に到りぬれば、三島の社の御しめの内拜み奉るに、松の嵐こぐらくおとづれて、庭の氣色も神さびわたれり、

〔倭名類聚抄〕五國郡伊豆國略管三註田方多加那賀奈賀茂
〔延喜式〕二十部伊豆國下管田方那賀右爲中國賀茂○中略

〔皇國郡名志〕伊豆國舊三郡今四郡

田方 △葦山 △北條 △蛭子島 國中

那賀 ●松崎 エナ 西海入江、口

加茂 △伊豆山 ●熱海 ●網代 相界ヨリ東南海向 ●手石
君澤 ●三島 ●宇久須 ●土肥 此郡海邊ヨリ東海道貫山入、千貫樋ヲ駿ノ界トス

今君澤郡加

○按ズルニ、本書及ビ次下ノ郡名異同一覽ノ符號ハ、山城國篇郡條ニ引ク所ノ、三書ノ凡例ヲ參照スベシ、